# 回味悠长的京都之旅

陈 勇

2014 年度京都大学-南京大学社会学人类学研究生学术论坛由京都大学承办，我有幸作为中方成员之一参与其中。从 8 月 11 日启程，到 8 月 15 日归国，有赖日方的周到安排，日程短促、高效而丰富多彩。论坛本身虽然结束了，但对这次活动以及京都这座城市的美好回忆却永远不会消退。

和前几届相比，本年度学术论坛安排既有传承，又有发展，除了既有的报告和点评，还增加了点评人的研究介绍、充当翻译的中国留学生的研究介绍等环节。程序更为紧凑，信息更为密集。大家的选题非常多样化，视角新颖，即使对研究领域不同的同行来说，也能获得很多的启发。扎实、严谨、规范，是日本同仁给我们的留下的普遍的深刻印象，值得我们认真学习。我们五位同学普遍反映日本老师的点评非常精准，非常富有建设性。就我个人而言，对我的报告进行点评的樱田凉子老师的意见非常中肯、切中要害，虽然樱田老师出于善意，未曾过于追究我的诸多错漏之处。

参观国立民族博物馆，是一次兼具学术交流和景点游览双重特色的活动。这里不仅研究阵容强大，学术资源丰富。而且在社会服务方面表现非常出色，不仅有世界各地的民俗实物展出，还有海量影像资源面向公众开放。负责接待我们的河合老师介绍说，由于博物馆是国立的，资金拨付非常充裕，条件甚至要远远好于东京大学。日本同仁在收集民俗实物过程中的艰辛和用心，也让我印象深刻，河合老师曾经为了从一位中国老人那里获得一张照片，除了口舌之功，还不惜花费不小的一笔资金才最终如愿。反观中国学界，虽然国家的资金拨付力度也非常之大，但研究者在社会服务意识、敬业精神方面，和日本同行差距甚大。

除了学术交流活动，京都方面还给我们安排了古建筑和自然景观的游览。三十三间堂，由于其悠久的历史和国宝级的馆藏而声名远扬。这座纯木质的殿堂距今已有一千多年的历史，进得其间，其宏伟的气势、制作的精良令人叹为观止，尤其是排列严整的 1001 座观音木质雕像，非常令人震撼。我们这些来自中国的参观者，不仅赞叹其工艺的高超，也敬佩日本社会对自身传统的珍惜。相形之下，中国的境况有太多值得反省之处，想想看，历史上有多少“阿房宫”毁于自身的战火与劫掠啊。

在京都期间，我们对日本的城市和民众也有了一些粗浅的直观印象。在这座以底蕴见长的古城，虽然未必有太多高楼，但市容整洁，市民的文明程度相当之高，彬彬有礼、安静有序。而在安静的外表下，却是热情和友好，有一次我在返回寓所的途中迷路了，向一位日本男子寻求帮助，通过汉字的“京都会馆”以及英语口语交流，他花了半个多小时陪同我直到找到寓所为止。而在一次就餐时，邻桌一位曾在中国工作过的松下日本员工，得知我们从中国来，热情地和我们攀谈起来，并且合影留念。前者让我感到温暖，后者让我感到亲切，这些，都是重情义的普通日本人啊！

此次活动，既是学术之旅，也是友谊之旅。我们有幸结识了不少学界前辈和青年才俊，他们除了业务精湛，还富有个性和亲和力。平田昌司教授在论坛的两天时间里，全程听完我们这些后辈的报告，而在用中文致辞时，睿智和幽默展露无遗，尽显长辈学者的儒雅之风。据说平田教授说日语的时候严厉异常，一说中文立马变得慈和无比，掌握了这一“机密”的学生，在没把握挨不挨骂的情况下，往往和教授说中文，便立刻能逢凶化吉、转危为安，据说这一手段屡试不爽。落合惠美子老师向我们提供很多宝贵的文本资料。福谷彬研究员提供周到的接待，用运动护套遮挡手上的伤处，体现对客人的尊重以及不亚于女生的细腻用心。中山大将研究员精深的汉字书面写作能力令我佩服。山口早苗博士则是一位会用淘宝购物的“中国通”，和我们的女生相谈甚欢。巫靓、姜海日、林子博，三位优秀的中国留学生，以及今中崇文研究员，共同为论坛提供了高质量的翻译，也承担了繁重的接待工作……

京都之旅短暂而难忘，正如中国和日本都有的茶道，乍一入口，或许并不浓烈，但幽香飘逸，细品之下，令人回味无穷……

# 長き京都の旅を回想す

陳 勇

2014 年度京都大学南京大学社会学人類学若手研究者ワークショップが京都大学によって開かれ、私は幸いにも中国側の一員としてこれに参加した。8 月 11 日に来日し 8 月 15 日に帰国したが、日本側の周到に準備した日程により、日程は短くとも効率的で豊かなものとなった。ワークショップ自体は終わったといえども、今回の活動および京都という都市の美しい記憶は永遠に消え去らないであろう。

前回までに比べ、今年度のワークショップの内容はさらに発展し、報告とコメントの他に、評者や通訳の中国人留学生の研究紹介も加えられた。プログラムも情報もさらに密なものとなった。参加者の研究テーマは非常に多様で、視角も斬新であり、たとえ研究領域が異なっているといえども、啓発されるところが多かった。着実、謹厳、規範というのは日本の仲間が我々に与えた普遍的な印象であり、我々が見習うに値のあることであった。我々五人には日本の教員のコメントが非常に精緻で非常に建設的であると映った。自分について言えば、私の報告に対する櫻田涼子先生のコメントは非常に適確で的を射ており、櫻田先生の善意からのものと言えど、いまだかつて自分の諸々の過誤をこのように指摘されたことはなかった。

国立民族学博物館の見学は、学術交流と見学を兼ねた特徴のある活動であった。民族学博物館はすぐれた研究者陣が揃っているだけではなく、研究資源も豊富である。その上、一般向けサービスの点でもすぐれており、世界各地の民具などの実物が展示されているだけではなく、膨大な量の映像資料も一般に開放されている。我々の案内にあたってくださった河合先生のお話では、この博物館は国立であるため資金が潤沢であり、東京大学よりもはるかに恵まれているという。日本の研究者の民具収集における苦労と熱意にもまた深い感銘を私は覚えた。河合先生は、かつてひとりの中国人の老人から一枚の写真を得るために、長い説得だけではなく少なくない資金も惜しまず、ついに願いを叶えたというのである。中国の学界に目を向けると、国家による資金の供給が非常に大きいといえども、研究者のサービス意識や職業意識の面では日本とは大きな差がある。

学術交流活動のほかに、京都では旧跡や景勝地を巡る機会に恵まれた。三十三間堂はその悠久の歴史と国宝級の所蔵品で名声は遠くに及んでいる。この木製の堂は今や千年以上の歴史を持ち、中に入ると雄大さや精巧な作りに息をのみ、特に厳粛に並んだ 1,001 体の木彫観音像は人を震撼せしめる。我々という中国からの参観者はその技巧の卓越さに驚嘆するだけではなく、日本社会が自身の伝統を大切にすることへの敬意も抱いた。これに対して、中国の現況は反省すべきところ多すぎる。少し考えてみても、歴史上少なからぬ「阿房宮」を自らの戦火や略奪で損失しているのである。

京都滞在中の体験から、我々は日本の都市と人々に対しても、大雑把な印象を多少なりとも持つようになった。物事の機微に長じたこの古都においては、高層の建物が必ずしも多くはないが、町並みは整然としており、市民の人間性は相当にすぐれ、雅やかで礼儀正しく静かで秩序がある。静かな外観の下にあるのは親切心と友好の念である。一度私が宿舎に戻るのに迷った時にひとりの日本人男性に助けを求めると、宿舎の漢字表記を手がかりに英語でコミュニケーションし、彼は宿舎にたどりつくまで半時間近く私に付き合って

くれた。ある食事の際には、隣の席に座っていたかつて松下電工社員として中国で仕事をしたことがあるという男性が、我々が中国から来たと知るや親しみをもって我々に話しかけて来て、その上一緒に記念写真を撮った。前者に対して私は温もりを感じ、後者には親しみを感じた。これらはみな人情に厚い普通の日本人なのである。

今回の活動は、学術の旅であり、また友情の旅でもあった。我々は幸いにも少なからぬ学界の先達や若い人材と知りあうことができ、彼らは自身の仕事にも通暁しているだけでなく、さらに個性と協調性も有していた。平田昌司教授はワークショップの二日間にわたり我々という後進の報告に耳をお傾けくださった上に、中国語で閉会の辞を述べ、叡智とユーモアを余すところなくご披露くださった。その姿には年長学者としての品格が漂っていた。聞くところによれば、平田教授は日本語で話す時には厳粛であるが、中国語で話すときには一転して柔和になるそうで、この「秘密」を知っている学生は、怒られるかもしれない時には教授と中国語で話すようにし状況を好転させるという。また聞くには、この方法は何度試しても間違いがないということである。落合恵美子教授は我々に対してたくさんの貴重な資料をご提供くださった。福谷彬氏は我々のために周到な準備してくださり、怪我で手が不自由であるにもかかわらず、客人を尊重し女性に劣らぬ細やかさを見せてくれた。中山大将氏の立派な中国語文章能力に我々は敬服した。山口早苗氏は淘宝（中国のネット通販）で買い物をする「中国通」であり、我々のグループの女性陣と話に花を咲かせていた。巫覿氏、姜海日氏、林子博氏の三氏らすぐれた中国人留学生と今中崇文氏は協力して高い水準の通訳を実現してくれた。いずれも大変手の込んだもてなしであった。

京都の旅は短くも忘れ難く、まさに中国と日本がともに有する茶道の如く、少しばかり口に含めば、濃厚ではないものの、ほのかな香りは飄逸で、追憶は絶えないのである。

（翻訳　中山大将）